



くらしかた・すまいかた Vol.22

藤野の家

アートと暮らしが溶け込む住まい

神奈川県北西部にある旧藤野町（現、相模原市緑区）は、湖や川、そして山に囲まれた自然豊かな地域です。戦時中に多くの芸術家に移り住んできたことから、平成に入ってから芸術を中心としたまちづくりを展開してきました。今回は芸術と自然と人が調和し、魅力的なコミュニティを形成している藤野ならではのくらしかた・すまいかたについて、お話を伺いました。

取材・撮影・編集：(株)地球工作所 Earth Planning & Workinc
取材協力：Hさんご夫妻 写真提供：Hさん（P1～6）

相模湖周辺での家探し

編集部：藤野に住むことになったきっかけを教えてください。

Hさん：以前は日野のアパートに暮らしていました。家族で相模湖へ遊びに来た時に「こんなところにお家があったらいいね。」と話したのがきっかけで、相模湖の周辺で家探し始めました。それから1年経ってから、不動産屋に「藤野に良い物件があるよ。」と言われて見に来たんです。

今は建替えましたが、当時この家は中古の物件で、不動産屋に見せてもらった7～8軒の中でも、一番ボロくて、「なんでこんな家を見せるんだろう。」と思った位です。

編集部：なぜその物件を購入したんですか。
Hさん：ここが唯一、駅まで歩いて通える距離にあったからです。うちの妻が歩いて通えないと困る、と言うのでここを購入することになりました。

編集部：中古の家を買ってすぐに建替えたのですか？

Hさん：いえ、何年かはそのまま住んでいました。元の家は一般的な間取りで、住んでみたら分かったのですが、冬場になると直射日光が40分しか入らない家でした。家の南側に住宅がたくさん建っているの、家と家の隙間からしか陽が入ってこないんですよ。

そんな状況だったので、妻に「なんでこんなところ買ったのよ。」とブーブー言われながら暮らしていました（笑）。そんな時に中越沖地震が起きて、ここもけっこう揺れたんですよ。地震で山が鳴るのを初めて聞きました。

それからニュースで住宅の屋根が谷底に落ちていく映像を見ました。この家もすぐ横が谷底になっていますし、基礎にクラックが入っているのは知っていたので、「明日は我が身だな。」と思い、家を建替えました。

編集部：震災も大きなきっかけだったんですね。
Hさん：そうです。そこから弊社（Hさんは某ハウスメーカーの研究所勤務）の研究

所のスタッフに色々話を聞いて、自宅の計画を練っていきました。

ちょうどその頃、研究所では省エネ住宅を決起盛んに試行錯誤やっている時で、微気候というロジックの骨格的なものもすでにできていました。ただ、この家を真剣に省エネ仕様にしようとしたのは、全体の計画の中でいうと4割程度でした。

編集部：その他にはどんなことをしたいと思ったのでしょうか。

Hさん：ペットとの共生です。家を建てた当時は犬で、今は猫を飼っています。彼らの匂いや、爪などで壁や床が傷つくといった問題を解決し、人間も快適に過ごすためにどうしたらいいのか、ということが大きなテーマでした。

ペットとの暮らしを助ける「汚しの工夫」

編集部：犬と暮らす家にするためにどんな工夫をしたのでしょうか。

Hさん：汚れたり傷ついたりする前提でそれが目立たないような素材や仕上げにしました。

床の例で言うと、床材は元は外壁用の堅い白木でしたが、塗装屋さんに家の裏の土を板にこすりつけたものを見せて、同じような色に塗ってもらいました。犬が散歩で外へ出れば、どうしても家の中に土を持って入るので、それなら最初から床を家の周りの土と同じ色に塗ってしまえと思ったからです。

壁も同じ考えです。使ったのは珪藻土ですが、左官屋さんに頼むときれいに塗ってもらえますが、それだと却って汚いのが目立つので、自分たちで塗りました。足場を組まないといけない場所、リビングの天井や階段や廊下などの縁の切れない場所は専門家にお任せしました。

自分たちで壁を塗る時にはペット屋さんにあるウサギの餌を買ってきて、珪藻土に混ぜてから塗りました。最初は緑色だったんですけれども、今はすっかり枯れて茶色くなりました。

編集部：それもいい味になっていますよね。

Hさん：きれいなものは汚れると余計に目立つので、最初から汚そうとしました。自社の製品で使ったのは階段だけです。いい意味で、そこだけ素材が違うので掃除をするバロメーターになっているんですよ。階段では物を落とすと少しの傷でも目立ちます。リビングの木の床は、元の状態がどうだったのかわからない位に傷がついていたり、へこんでいたりしますがまったく気になりません。

編集部：そういう傷やへこみも、いい味になっていますよね。

Hさん：そうですね。汚されることや傷がつくことを想定した仕上げにしておいてよかったです。

ただ家を建て替えた当初に飼っていたのは犬で、その犬が死んでしまった後からは猫を飼っているのですが、犬の仕様のままではうまく猫を飼えないということがわかりました。

編集部：それは具体的にはどういったことでしょうか。

Hさん：例えば猫の爪跡ですね。猫が床から窓枠に乗る時に壁に手をつけてから登るので、窓の下の壁に爪跡がたくさんついています。珪藻土をあえてきれいに塗っていないので、部分的に補修できるのがいい点です。後から適当にピピッと塗れば爪跡もそんなに気にならないんじゃないかと思っています。

建替えを機に、微気候を活かした住まいへ

Hさん：そういう犬や猫の話がある中で、では人間様はどうするのかということで研究所の方に相談したのがエアコンの設置台数でした。建替え後のリビング、ダイニングは2階にあって、キッチンまで入れると24畳ほどの広さがあります。その空間の冷暖房について、8畳～12畳タイプのエアコンを2台設置したほうがいいのか、それとも1台でカバーできるのかを聞いたんです。結論としては1台でいいということでした。ただし、コストとエネルギー効率の面からみれば2台の方が得だとも言われました。

編集部：2台設置する場合、どういう風に配置するのが効果的なんでしょうか。

Hさん：つけるなら設置面を変えた方がいいということでしたが、1つの空間にエアコンが2台もあるのが嫌で結局1台にしました。

編集部：1台で大丈夫でしたか。

Hさん：問題ないですね。僕自身がエアコンが好きじゃないのと、建替えの時に間取りを変えて、開口部を大きくとったことと、リビングにロフトと高窓を開けたので、家の中に風の流れが生まれて、まず夏にエアコンをかける必要がほとんどなくなりました。

1階の北側の部屋の窓とドアの上の欄間を開けておいてあげると、下からスーッと空気が流れてくるんですよ。微気候的にも家の中にいい風の流れができています。ここの地形からすると主に東側から西に風がよく吹くんですよ。上空は違うのかもしれませんが、ここは谷筋になっているからかな。家の下の方には川が流れているんですよ。

編集部：ロフト部分に高窓があると日照的にもよさそうですね。

Hさん：ちょうど11月頃から高窓から日が入って、1日中ずっとリビングの壁にあたるようになってくるんですよ。部屋の中でも太陽の動きをずっと見ることができるのがとてもいい感じで気に入っています。

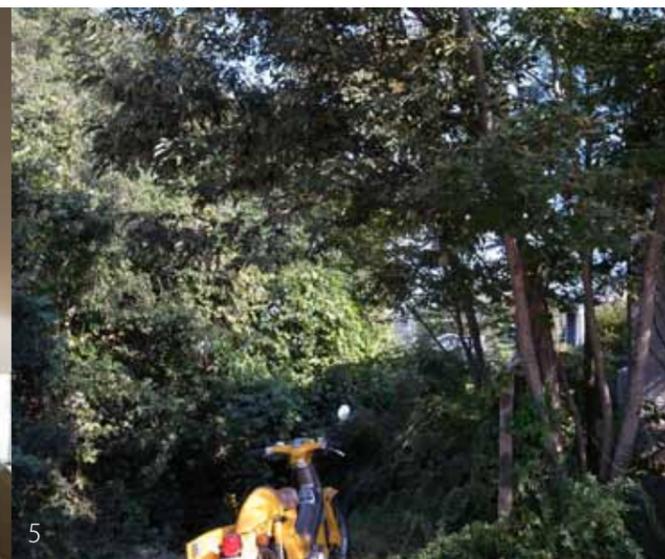
編集部：冬の寒さは改善されましたか。

奥様：(建替え)前の家はすごく寒かったんで、それに比べたらとても暖かいと思います。

Hさん：面白いことに、人って慣れると口にしなくなるんですよ。



1. 建替え当時の主役。犬のムッシュ。2. 現在の主役は猫に変わった。3. 窓の下の壁は猫の爪跡がたくさん。でも補修しやすい素材にしてあるので安心。4. ロフトは畳敷きで、秘密の部屋の雰囲気。この南面の窓が日射と夏季の通風におおいに役立っている。5. 家の北側にある緑地。下の方に川があるので、夏季には涼しい風を取り込める。6. 玄関にはHさんの作品の他に、別のアーティストの作品も常時展示されている。7. 建替えを機にリビングとダイニング、キッチンも2階に移動し、大きな窓をたくさんつけて冬場の日照不足も解決した。



夏の涼しさは今だに言うんです。「風通しがよくて涼しいね。」とか。でも冬の暖かさは3年位前から言わなくなって、今度は「寒い」と言いました。建て直してすぐから「この家は暖かいね。」と5年間は言い続けていたんですが、慣れちゃったみたいですよ。

奥様：2階は床暖房だけなので、あまり「火」という感じがしないからなのかしら。
Hさん：2階は床暖房だけで、エアコンをほとんど使いません。
編集部：雰囲気的には薪ストーブ等が似合いそうですが、
Hさん：気持ちはわかるんですが、メンテナンスとかを考えると…。薪はけっこう手に入りやすい土地柄ではあるんですが。

編集部：さすが藤野ですね。
Hさん：実際に使っている方もたくさんいますし、薪ストーブのように火が直に見れるのもいいと思います。

編集部：間取り自体はHさんがお考えになったんでしょうか。
Hさん：そうです。妻に日常使いに関わることはもちろん聞いて、その意見を取り入れてほしい決まったプランを研究所の当時の社長に見てもらったんですね。その方は住宅の設計をずっとされてきた方で、キッチンと洗面所をつなげるドアをつけた方がいいというアドバイスをもらい、その通りにしました。

編集部：アドバイスに従ってどうでしたか。
Hさん：本当に開けておいてよかったですよ。使い勝手が全然違いますからね。

藤野ならではのライフスタイル

編集部：藤野に暮らすようになって、何かライフスタイル自体に変わったことなどありましたか。

Hさん：私は藤野に来てから陶芸を始めました。藤野芸術の家という施設があって、子供と一緒に遊びに行ったことがきっかけでした。施設に通い始めの頃は木工をやっていたんですが、たまたま知り合いの陶芸家の方がそこで指導員をされていて、「Hさん、やってみない？」と声をかけていただいて始めました。だから藤野に引っ越してこなければ陶芸をやることはまずなかったと思います。

編集部：陶芸は、最初はどんなことから始めるんでしょうか。
Hさん：何を作るというということはないですが、陶芸を始めた誰もが思うのが、自分の家の食器を全部自分で作りたい、ということで、実際自分もやってみました。次から次へと作っては持ち帰ってきたんですが、重いし、使いづらいし、収納できないしということで妻には不評でした（笑）。

編集部：なるほど。
Hさん：そういう訳で一通りやったんですが、食器は食器で飽きるんですよ。それでオブジェも楽しいなと思って作り始めました。それから僕は仕事で撮影をするセクションにいた時期があって、こんなものが欲しいと思ってもなかったのに、それなら自分で作ってしまえ、と思って作ったりしましたね。

藤野に来なければ僕は陶芸をやっていなかったし、おそらく妻も同じだと思います。彼女はフェルトや織物をやっているんですが、そういう作家さんたちとの出会いは大きかったですね。その他にも溪流釣りとか、藤野は自然が多いですからね。子供たちとももちろんやりたかったんですけど、けっこう危なっかしいので一人で行ってました。妻は黙認してくれていましたね。

編集部：お子さんは何歳くらいだったんでしょうか。
Hさん：藤野に引っ越してきたのが平成元年くらいだったので、上の子は幼稚園に入るか入らないか位、下の子は1歳位でした。元々

子供たちを土の上で遊ばせたいという思いがあって。実際、土の上を駆けまわると子供たちを見て、引っ越してきてよかったと実感しました。

奥様：引っ越してきた始めの年にはたくさん雪が降ったので、かまくらや雪だるまを作ったり、すぐ近くの傾斜でやそりをしたり、子供たちもとても喜んでいました。

編集部：やはり都内に比べて雪が多いですか。
Hさん：そうですね。こんなに雪が降るんだとビックリしました。でもそれよりも2014年の冬は多かったです。1m以上積りましたからね。

奥様：そういう意味で言えば、藤野で家を建てるなら寒冷地住宅の仕様にした方がいいんですかね。中途半端な位置なのかしら。
Hさん：寒冷地仕様なのは北海道だけです。東北や長野だと準寒冷地仕様ですね。

奥様：そうなんだ。藤野は寒いから準寒冷地仕様にした方がいいと思うのよね。
Hさん：この建物を作る時には断熱材を入れられるだけ入れてくれたし、床下も個割りになっているので、通常の住宅よりは断熱性能がしっかりしていると思います。

奥様：私は北海道出身で、冬でも家の中ではTシャツで過ごせるくらい暖かい環境で育ったこともあって、そういう感覚でいるんですよ。

Hさん：だから僕が家の中で薄手のダウンとか着てると不思議な

顔で見ているんですよ。
奥様：家の中でダウンを着るなんておかしいな一、と。だから床暖だと物足りない感じがするのかしら（笑）。

芸術村としての成り立ち

編集部：先ほどの話に戻りますが、藤野には芸術家が集まる素地があったんでしょうか。

Hさん：そうですね。戦時中に藤田嗣治を始めとした画家の方たちが疎開してきて、作品も残っています。それがきっかけで、作家さんが住みやすい土地になっているんでしょうね。それからちょうど僕たちが越してきた平成元年頃に神奈川県で藤野芸術村構想というのが立ち上がっていて、年間8億の予算が充てられていたんですよ。

編集部：そんなにあったんですか。
Hさん：その予算でフィールドアートを買ったり、イベントを催したりしていましたね。

奥様：ラブレターとかが有名ですよ。
Hさん：そこで作家さんたちに移住してもらおうとしたようで、たくさんの人が藤野に移り住んできたようです。その当時はまだ

移り住んできたアーティストの人たちと地元の人との交わり方が非常に希薄で、彼らが自分たちのパフォーマンスとして何かイベントをやっても、そのやっている所だけはワッと盛り上がり

ているんですが、そこから外へ出るとシーンとしているような町で、なんだこの落差はという感じでした。

でもそれから25年経って世代交代が起き、一番最初に引っ越してきた作家さんたちが60代になって現在の活動の主流になっています。地の人ではないんですが、それなりに認知されています。

編集部：今も移住されてくる人が多いんでしょうか。
Hさん：新しい作家さんたちが藤野で色々やりたいと言って、移住のための家を探している人がたくさんいますね。藤野はイベントが多いんですが、秋は特にイベントが多くて、9月から11月までは、今日はどこで何をやっているという位、毎週のように大小のイベントをやっています。

編集部：ここ最近で特に面白かったイベントはありますか。
Hさん：この夏休みに藤野アートビレッジという所である作家さんたちがやったイベントが面白かったです。美味しいコーヒーを淹れられる女の子と美味しいサンドイッチを作れる女の子たちが朝の6時から10時までの間だけお店を開きます！とネットで告知したら、それを見た地元の人やアーティストの人がたくさん来て

ました。最初は誰も来ないんじゃないか、と心配していたのですが、蓋を開けてみれば盛況で、地元の人やアーティスト、色んな人が集まっていた。

とても盛況だったので、その後3回位やったんですけど、最初に必ずラジオ体操をするんですよ。6時からの開催なので、6時半からのラジオ体操をそこに集まった人たちでやってからサンドイッ





12

(P5-6) 8.Hさんの工房には魅力的な作品がたくさん。9.秋のイベント用の作品として、新しい年の干支が制作中だった。10.2014年夏に行われた期間限定の朝のイベント。美味しいサンドイッチを味わう前にみんなでラジオ体操。11.美味しいコーヒーを目当てにたくさんの方が集まって、新しい交流が生まれた。(P7-8)12.2014年のサニーサイドウォークでの展示の様子。13.毎週金曜日に届く天然酵母のパン。内容はお任せなので何が届くかわからないという楽しみもある。



13

チを食べて、コーヒーを飲んで、みんなでおしゃべりをして、「じゃあ」と言って解散するんです。

編集部：楽しそうですね。その二人も藤野の方なんですか？

Hさん：藤野と上野原ですね。

奥様：うちもその子からパンを買っているんですよ。

編集部：お店はどこかにあるんですか。

Hさん：ないです。自分の所で作っていて、届けてくれるんですよ。奥様：藤野の駅前の店にも卸したりしているようです。天然酵母で美味しいんですよ。

Hさん：毎週金曜日にうちとお向かいさんに届けてくれるんです。お向かいさんは食パンを頼んでいて、金曜日に届いたパンを使って土曜日に美味しいサンドイッチを作って食べるのが楽しみなんだそうです。うちはお任せで色々な種類のパンを届けてもらっています。予算内で納めてくれるし、毎回どんなパンが届くのかを楽しみにしています。

暮らしの中に芸術を溶け込ませる楽しみ

編集部：色々なイベントがあるようですが、その中でHさん自身が主催者側として関わっているイベントはありますか。

Hさん：僕が関わっているのは年に2度程度です。1つは春先にある陶器市でこのエリアの中で一番大きいイベントですね。僕は陶芸の基本を習いたくて、1年程、教室に通ったことがあります。その教室の先生が藤野の陶器市の発起人で、その先生が陶芸の作家さん何人かに声をかけて始まったんです。面白いのは、今でこそ部分的にはフリーマーケット的に、1つの会場へ皆が集まって作品を出していたりするんですが、基本的には作家さんの家でオープンハウス形式での展示・販売だったんです。僕もその焼かれたものよりも作家さんの家の中がどうなってるのかな、という方に興味津々でした。僕も教室でやっていた頃は教室で出展しましたが、以降は自宅で出展していました。最近は陶器市の時

だけは外でやろうかという話をしています。

もう1つは11月から開催されるサニーサイドウォークです。それは家を会場にしようと思っています。

編集部：陶器市とサニーサイドウォークは別物なんですね。

Hさん：サニーサイドウォークは主要な会場を全部回っても1周40分圏内なので、陶器市に比べるとこじんまりとしています。毎年8軒から10軒位の家が参加していますね。

僕の所は販売というよりも作家さんの作品を展示するための場所として家を提供しています。

編集部：家を提供するとはどういうことでしょうか。

Hさん：作家さんたちって陶器市の出展だとか言うと、自分の作品を山積みにして販売することが多いと思うんですけど、テーブルの上をちゃんと自分の作品でテーブルウェアとして作りこむ機会というのがなかなかないんですね。今年は長谷川奈津さんという女性の作家さんをお願いして、我が家のダイニングテーブルの

上をお任せしてまして、4人から最大6人までの家族が食事をするという設定で自分の作品でコーディネートしてもらおうことにしました。彼女は作品数が少ないので、酒器とかで宴会の雰囲気にしたと言っていました。ここがどんな風になるか楽しみです。壁は壁で絵の方をお願いしていますし、今回はモビールもあるんですが、その素材が和紙なので絵の方も和紙の作家さんをお願いしたんです。

編集部：オープンハウスと言っても必ず住人の方の作品を展示している訳ではないんですね。

Hさん：そうですね。住まいとしての場があって、どういう風にそういうものを暮らしの中に溶け込ませて楽しめるかということ表現したいと思っていますね。

編集部：楽しみですね。本日は貴重なお話をありがとうございました。(終)